

2009年1月16日
13:38

投資のあり方について話す。まず今起こっている金融危機。資金をどこに投じるかと言うところから生じている問題である。実物的な次の新しい産業構造に寄与する形で技術を進歩させたり新しい雇用など色んな投資があるが、あまり投棄的な投資にお金が投下されると実体経済の何百倍となる金融的な流れが実体経済に悪い影響を及ぼすということがわかってきている。

実物的な社会に投下される資金についても色んな落とし穴があるという話をしたい。テーマは三つ。一つは所得分配と投資のあり方。二つ目は競争社会が持っている落とし穴。どういう風に投資をしたら健全な競争的な社会を維持できるか。三つ目は地球は無限に広いという開放システムの中で経済が営まれているという考え方は難しい。地政学条件が顕在化していくということで、環境という大きなテーマと投資のあり方をどう考えるか。この三つの柱で考える。

さて、今日はその一部で所得分配と投資のあり方について話す。先生が東ベルリンに研修に行った時のこと。そこでは日本のテレビのブラウン管の生産を行っていた。そこで先生が感じたのはエネルギー、つまりガソリンの質が違うということだった。もちろん当時ヨーロッパは車社会になっていたもので、車はたくさん走っていた。燃料は同じなのだが、ガソリンの質が違って、その町の臭いにおいを作っていたのであった。しかし現地の人には気づいていない。先生はこれに衝撃を受けたらしい。それが先生が地球環境研究に興味を持ったきっかけらしい。もう一つショックがあったらしい。工場長から説明を受けたのだが、工場の廊下に色んなスローガンがあるのだが、毎月の目標値と達成率が書いてあった。99%とかいい数字ばかりだったので先生は多少懐疑的になりながら話を聞いていた。その後、日本から来た技術屋が教えてくれた。90数%が東ベルリンにとっての評価基準なのだが、技術屋にとっては達成値ではなく目標値が問題なのだそう。この工場のポテンシャルから見れば、この目標値の1.5倍でいいはずなのだそう。この目標自体が低すぎるのだ。なので、この目標値に対しての達成値90数%ならば、経済の論理から見れば意味のない数字なのである。つまり、確かに計画を立ててそれに対して達成率を出すというプロセスは、まずその目標値がどこから出てきて、どういう基準で出てくるのかという判断をしなければならぬし、達成率に関しても何を排除し何を含んで達成率を出すかによって、見かけなのか実質七日も変わってくる。なので、数字というものは、使う人の意図によって相当操作できるかもしれない。意図的に開発することは出来ないと思うが、少なくとも数字の持っている影響力は大きい分だけ判断するときに慎重にあるべきなのである。基本的に生産性などはそれぞれの制度設計の段階で決められることだし、分配に関しても何を基準にするかには長い世界経済の歴史の中で変わってきたのだろう。私たちは案外見かけの数字に翻弄されているかもしれない。そういう疑問をいつも忘れてはいけないと思う。

何故計画経済の元でそういうことが起こったのか。何故社会主義国でそういう経済へのガバナンスの方法がとられたのか。これは、相当程度判断するときに、分配ということがすごく重要なのである。生産性という目標値よりも、達成率において分配されるべきなのである。働いている人たちの技術が高ければそれなりの分配がなされるのである。したがってここの生産性よりも、優先順位によっては分配というものが社会の安定や富を決めるものだという考え方が計画経済を作り上げたし、精神的支柱として作り上げていったのである。したがって分配を議論なしに経済の仕組みは考えられないし、投資のあり方を考える時も分配の問題を避けては通れない。投資というのは、生産要素と言うところの資本をどう蓄積し、その蓄積された資本が同府か価値を生んでいくか、そして次の時代に銅生産要素として繋がっていくかが重要なのである。したがって投資という視点から分配の問題を見れば、当然資本と労働の分配ということがとても重要な政策課題となる。重視すればするほど計画経済であったほうがより良いというような理論的帰結になる。そういう考え方も社会に応じては重要。しかし優先順位の問題をいつも忘れないようにするべきである。

そこで、分配問題が計画経済か市場経済化というときにどっちが優先されるかということであるが、先週に直接投資の問題がいかに途上国にとって、貿易と直接投資を組み合わせるかに経済発展につなげて行くかという中で先進国の企業の国際化戦略がある意味でプラスに影響する可能性が大きいので、国境を越えた企業展開が途上国の資本不足資本不足を補う重要なチャネルであるという話をした。これもまさに投資の話である。投資のあり方を考えたときに、結局途上国に資本が流れれば成長に繋がるとかつては考えられていたので、どんな資金の流れでもある意味では良かった。しかし、やはりそれだけでは経済発展に繋がらない。資本がどういう風に使われて、どういう産業構造に結びつけるかまで議論しないとただ投資が増えるだけでは現実的な経済発展には結びつかない。ということで産業分析などのミクロのアプローチをきちんとしておかないとただマクロベースで資本を増やしても発展には繋がらないということがわかってきた。したがって直接投資の問題も実は投資のあり方の問題である。

しかしさっきも申し上げたように、投資のあり方の中で分配もきちんとしなければならぬということで、直接投資に限らないが、資本蓄積と分配の問題を簡潔に整理していく。

これやったね。限界生産力逓減の話だよ。資源が制約している中で生産要素を追加的に一単位生産する

毎に、それによって増加する生産量が逓減していくという法則だ。なんかテストに出なさそう。グラフでどうかは出ないので必要なし。